

【登熟の向上を図る水管理】

- 登熟の向上を図るため、出穂30日後までは間断かん水を実施し、土壤水分を保持しながら稲体の活力を維持することが重要です。特に、開花後25日間は米粒が肥大するため、土壤水分が不足しないように注意します。
- 最高気温が30℃以上になる日は、用水を確保できる地域ではかけ流しかん水を行い、地温を下げ根の機能減退を防止します。また、フェーン現象等で乾燥した風が強い日は湛水状態を保ち、蒸散による稲体の消耗を軽減します。
- 落水時期は、出穂30日後頃を目安としますが、稲の登熟度やほ場の作業性等を考慮してください。落水時期が早すぎると、根の機能が低下し登熟が妨げられるため、低温や日照不足により登熟が緩慢な場合や、生育が旺盛な場合は、落水時期を遅らせてください。
- ★カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、出穂期3週間後まで湛水管理を厳守し、カドミウムの吸収を抑制してください。

【斑点米カメムシ類の防除対策】

- 水田内に出穂したカヤツリグサ科雑草（ホタルイ等）やノビエが発生しているほ場、イネ科雑草が主体の牧草地や休耕田等の発生源に隣接しているほ場では、斑点米被害軽減のため、出穂期24日後頃にキラップ剤を必ず散布するようにしてください。
- 近隣に水稻以外の作物（野菜等）がある場合や養蜂業者がいる場合は、薬剤散布前に情報交換を密にし、散布作業を実施してください。
- 飼料用米についても、主食用米同様に防除を徹底してください。
- 稲の収穫2週間前までは、草刈りを行わないでください。

【刈取適期の判断】

刈取適期は、品種や栽培方法によって異なります。出穂後日数や積算気温を参考に、籾の熟色をよく観察して総合的に判断しましょう。

【刈取適期の判定基準】

- ①籾の熟色
葉や穂首が緑色であっても籾の黄化程度が90%（黄色＋黄白色の籾数の割合）の頃
※熟度の進展は緑（青）色→黄色→黄白色と進む
- ②出穂後の日数
早生種（あきたこまち等）：出穂後45日頃
中晩生種（めんこいな・ゆめおぼこ等）：出穂後50日頃
- ③出穂後の積算気温（出穂期翌日から日平均気温を積算した値。）
早生種：950～1050℃（1100℃を超えると胴割粒増加）
中晩生種：1050～1150℃（1200℃を超えると胴割粒増加）